プレミアムステージを彩る若き俊英たち

KEIBUN創立30周年記念公演

豊かな感性に彩られたピアノの響きに心ふるわせて

「お客さまの前で演奏することは本当に楽しい。聴いてくださる方のパワーが力になりますから」と笑顔で語るのは、ピアニストの辻井伸行さん。時には優しく、時には情熱的に広がる豊かな音色が、聴く人の情感に訴えかける稀有の才能の持ち主だ。

ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール優勝後は、活動の幅を広げ続け、今やチケットを押さえるのも困難だという。そんな彼が2015年1月、ついにびわ湖ホール初登場！才気あふれる新進気鋭の指揮者ヴァシリー・ペトレンコ、ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団と共演が決定した。プログラムはラフマニノフのピアノ協奏曲第3番だ！

「以前から演奏したいと思っていたあこがれの曲です。流麗で美しい旋律の第2番に比べ、第3番は重厚なうえ、スケール感がある。広大なロシアの大地を感じさせてくれる大曲だけに、ピアニストにとっては難曲中の難曲。それだけに練習のしがいがあります。また、一人で音をつくりあげていくソロリサイタルとは異なり、オーケストラとの共演は指揮者、他の楽器の演奏者たちとの共同作業。みんなで音楽をつくっていく共有感、一体感は代えがたい喜びです」

幼い頃からオーケストラとの共演を重ねてきた辻井さん。さまざまな人との出会いが、彼の才能の開花に大きく寄与してきたといっても過言ではない。中でも2009年、ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールで優勝した際、ヴァン・クライバーン本人からかけられた言葉が忘れられないという。

「クライバーンさんは、ぼくの優勝を心から喜んでくださいました。亡くなる直前に会った時に〝クラシック音楽の本当の良さは、生演奏でしか伝わらない。一人でも多くの人にコンサートホールに来たいと思わせるピアニストになりなさい〟と言葉をいただきました。今も毎回コンサートに臨むにあたって、その言葉に思いを馳せています。お客さまに音楽の魅力、素晴らしさを、コンサート会場で感じていただけるよう尽力したいと、常に考えています」

辻井さんは作曲家としても活躍中だ。映画『神様のカルテ』、テレビドラマ『それでも、生きてゆく』ではテーマ曲を担当するなど、その才能をいかんなく発揮している。

「映画やドラマの音楽を担当するときは、撮影現場に足を運び、スタッフやキャストの皆さんと話し合い、作品へのインスピレーションを得ています」

天賦の才能に恵まれているかのように思えるが、実は人一倍努力家なのだろう。最後に今後の展望についてうかがってみた。

「将来はラフマニノフやプロコフィエフのようなピアノ協奏曲を作曲したい。ぼくの大好きなショパンもそうですが、彼らは30代で後世に残る名曲を作曲しています。ぼくも将来彼らのような大曲を作曲できればと思っています」

ひとつひとつ夢を現実へと近づけている辻井さん。輝きを増し、前進し続ける彼にとって、その夢が叶うことは、そう遠い未来ではないように感じる。

Close Up Interview

辻井伸行

Nobuyuki Tsujii

2015年1月、KEIBUN30周年記念感謝祭のフィナーレに登場するのは、国際的な活躍で人気が高まるピアニスト、辻井伸行。初めてとなるびわ湖ホールのステージで、さらなる飛躍をめざして超絶技巧のラフマニノフのピアノ協奏曲第3番に挑戦する。

辻井伸行（つじい・のぶゆき）

東京生まれ。2009年6月に米国テキサス州フォートワースで行われた第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールで日本人として初優勝して以来、国際的に活躍している。11年11月にはカーネギー・ホールの招聘でリサイタル、12年5月にはアシュケナージの指揮でロンドン・デビュー、7月にはゲルギエフの指揮でサンクト・ペテルブルクにデビュー。13年7月にはイギリス最大の音楽祭「BBCプロムス」に出演し「歴史的成功」と称賛された。14年1月にはオルフェウス室内管弦楽団との共演によるカーネギー・ホール再登場、3月にはゲルギエフの指揮でミラノ・スカラ・フィルとの初共演が大反響を呼んだ。07年よりエイベックス・クラシックスより継続的にCDを発表し、2度の日本ゴールドディスク大賞を受賞。作曲家としても注目され、映画《神様のカルテ》で「第21回日本映画批評家大賞」受賞。

次代の巨匠と期待される指揮者がびわ湖ホールに登場!!

ショスタコーヴィチの転生か!? その〝真価〟が試される第10番

ヴァシリー・ペトレンコ

来年1月、びわ湖ホールの舞台でピアニスト・辻井伸行と共演するのは、ロシア人指揮者のヴァシリー・ペトレンコとロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団。創立175周年というイギリスで最も伝統のあるオーケストラのひとつで、ペトレンコが2006年から首席指揮者を務めている。

ペトレンコとロイヤル・リヴァプール・フィルは現在、ショスタコーヴィチの交響曲全集の録音に取り組んでいる。そのプロジェクトは高く評価され、ショスタコーヴィチに関する現代的な解釈と演奏で、ペトレンコは〝新時代のショスタコーヴィチ〟とも呼ばれている。世界が注目する指揮者のひとりだ。

あるインタビューで「ショスタコーヴィチの音楽は、ソ連の歴史とショスタコーヴィチ自身の物語の中へ深く入り込んでいく壮大な旅のようだ」と、ペトレンコは語っている。

©Mark McNulty

ペトレンコにとって、ショスタコーヴィチは同郷の偉大な作曲家であり、ショスタコーヴィチ没年の翌年に生まれたという因縁もおもしろい。2つの世界大戦と東西冷戦という激動の時代を生き、旧体制の干渉のもとで表現を強いられてきた芸術家たちの精神的な状況を考えると、ショスタコーヴィチの音楽を真に理解するには深い洞察と思索が求められる。しかし、多感な15歳でソ連の崩壊を体験したペトレンコが、ショスタコーヴィチの音楽と向き合うスタンスはとてもクールだ。客観的に楽曲そのものの本質を見出してくれる。

今回披露する交響曲第10番は、完成度の高さからショスタコーヴィチの最高傑作といわれ、彼のエッセンス(謎も含め)がいっぱい詰まった作品である。発表はスターリンが亡くなった1953年。第9番がスターリンに批判され、しばらく交響曲の作曲を中断していたが、スターリン体制の終焉とともにその呪縛から解放された感がある。楽壇での評価は賛否分かれたが、ショスタコーヴィチの自伝的作品と考えるのは深読みしすぎだろうか。新世代のペトレンコがこの楽曲をどのような演奏に仕上げるのか、いまからとても楽しみだ。

©Mark McNulty

ヴァシリー・ペトレンコ(Vasily Petrenko)

1976年サンクトペテルブルク生まれ。同地の音楽院でイリヤ・ムーシン、マリス・ヤンソンス、ユーリ・テミルカーノフらに指揮を学んだ。2006年9月から首席指揮者を務めるロイヤル・リヴァプール・フィルとの演奏活動を通じて急速に評価を高め、Naxosレーベルに録音したショスタコーヴィチ:交響曲第10番が2011年の『グラモフォン』誌の最優秀管弦楽録音を受賞するなど、最も注目されている指揮者の一人である。

Information

辻井伸行とペトレンコ、若き俊英が揃い踏みするステージ!
ファンが注目する話題の公演だけにチケット完売は必至!!

KEIBUN30周年記念感謝祭
スペシャル・コンサート

辻井伸行(ピアノ) with ヴァシリー・ペトレンコ(指揮)
ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団

●2015年1月24日(土) 16:00開演　滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール
●曲目/ショスタコーヴィチ:祝典序曲 op.96、ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第3番 ニ短調 op.30、ショスタコーヴィチ:交響曲 第10番 ホ短調 op.93
●入場料/KEIBUN友の会会員限定30周年記念シート(SS席)20,000円(5/15ねっとも・電話最優先受付開始)
一般 S席19,000円 A席17,000円 B席15,000円 C席13,000円 D席11,000円 E席9,000円(一般発売6/15予定)
※S・A・B席はKEIBUN友の会会員1,000円引。S~E席の友の会会員受付は6月号でお知らせします。